転生者は原作ブレイクしました

ダークサイド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
転生者は原作ブレイクしました

【Ｎコード】
Ｎ０９０９Ｙ

【作者名】
ダークサイド

【あらすじ】
趣味嗜好がイタイ以外普通の男性が女神様の姉の気まぐれで殺された、彼は女神から提案された特典でＦａｔｅの世界に女性になって転生した。彼女は原作に介入するのかそれとも原作ブレイクするのか？

プロローグ（前書き）

この小説は二次創作品になります、そのため原作とは違う展開、オリジナル要素が含まれます、ご注意ください。

プロローグ

ある日、私の世界は終わりを告げた。私はその日がくるまでは普通の男性だったのに・・・・。
あれは職場から帰る途中だっただろうか、目の前に歪んだ空間があった。
康行「あれ、疲れてるのかな？」
康行はそんなことを思っていた。それが康行の最後の記憶だった。
次に康行が目を覚ますと霧の中のような場所に立っていた。
康行「えっ、なんでこんなところに居るんだ？職場から帰る途中だったはず。」
女神「気がつきましたか？康行君。」
いきなり声をかけられた、康行は声のした方にふり振り返る。そこには綺麗な女性がいた。
女神「先に謝っておくわ、ごめんなさいね。」
康行「なぜ謝る？」
女神「実は、私の姉が気まぐれであなたをその、殺しちゃったの。」
康行「嘘だろ。俺をからかうの止めてもらえないだろうか？」
女神「嘘じゃないんです、あなたが最後に見た者は姉の使い魔なの。」
女神いわく、あれは俺がいた世界では死神と言われているとのことだった。
女神「でね、そのお詫びにあなたに二度目の人生を上げるわ。」
女神「で、あなたの趣味嗜好を覗かせてもらったんだけど。」
そこで急に赤面する女神、今、この女神なんて言った・・・？
俺の趣味嗜好を覗いた・・・　そして赤面してる。ヤバイ、非常にまずい。
女神「・・・イタすぎますね、この変態。あなたの股間を私の足で踏んであげましょうか？」

康行「いえ、結構です、女神様。」
女神「クスッ、冗談ですよ。」
康行「女神様、冗談きついぞ、それはいいとして、なんか特典はないのか？」
女神「特典ですか、じゃあ。」
女神はにこりと微笑むとこういった。
女神「あなたの行きたい世界、能力、性別を選択させてあげます。」
女神の提案は実に素晴らしいものだった。俺は行きたい世界にＦａｔｅの世界、能力にアーチャーの投影魔術、固有結界、膨大な魔力を貰った、性別は女にしてみた。
女神「わかりました、では二度目の人生楽しんでね。機会があったらまた逢いましょう。」
女神「あっ、あなたの家にプレゼント用意してあるからね。」
女神がそう言った瞬間景色が変わり康行は転生者になった。

プロローグ（後書き）

はじめまして　ダークサイドです。初めて書きますので読みにくかったりするかもですが、よろしくお願いします。
今回は康行についてです、
年齢２９歳、　髪は黒の短髪です、まあこのへんで、彼もう死んでるんで・・・・。
康行「作者よ現実では私は生きてるぞ。」
ダ「康行どこからこの世界に。」
康行「作者よ俺の設定はあなた自身なんだから、名前こそ違うけどね。」
作者「忘れてた・・・。」
康行「という訳で、読者のみなさんよろしくね」

な、なんでこうなるの。（前書き）

どうも作者です、今回から本編スタートです。まあ何か変な展開になりそうですが、よろしくお願いします。

な、なんでこうなるの。

深山町の一角にある日本家屋の前に私は立っていた。表札には星村と書いてあった。
ここが女神が用意してくれた家のか？とりあえあず入ってみることにした。
玄関の引戸を引いてみるガラガラと音をたて引戸が開いた。無用心極まりない、私は思った。
女神「おかえりなさいませお嬢様。」
玄関先になぜかメイド服を着た、女神が立っている。
女神「あら、こういうシチュエーション嫌いだった、千夜ちゃん？」
千夜？誰のこと、私が悩んでいると、女神がこう言った。
女神「あっ、ごめん、わからないわよね。あなたの新しい名前よ。星村千代がフルネームね。」
女神からの補足によると、年齢は１６歳に若返っているらしく、穂群原学園の二年へ編入手続きが済んでいるらしい。
千代「また、高校にいくことになるなんて。」
私がため息をついていると背後に気配を感じた。女神がいつの間にか後ろに立っている。
女神「千代ちゃん可愛いわよ、お姉さんがいろいろ教えてア・ゲ・ル。」
千代「ちょっ、どこ触ってんのよ、この百合女神。」
私が女神を払いのけようとしていると、女神に押し倒されて頭をぶつけてしまった。
千代「痛いじゃないのよ、あれ、居ない？」
女神「千代ちゃん、またね、次は逃がさないからね。」
女神はそう言い残すと時空の歪に消えていった。私は半分呆れながら家の居間へと入って行った。
そこには千代ちゃんへと書かれた、衣類ケースと穂群原学園の制服、

通帳が置いてあった。
衣類ケースを開けるとそこには女神からのメッセージと私のための服が入っていた。

―千代ちゃんへ―

当面の服と生活費をプレゼントしとくわね。変なワカメには気を付けてね。
そこでメッセージは終わっていた。ワカメ？まさかあいつのことかな？私の頭にはワカメ髪の嫌味な奴が浮かんでいた。
女神の先程の行動から変な服が入ってるのではと思ったが、いかにも女子高生らしい私服が用意されていた。通帳に目を通すとそこにはびっくりする額が記載されていた。
千代「1億！！、生活費よね、これ？そういえば服もブランドのものが多かったような。」
こうして私の第二の人生が始まった。
千夜「さて、何しようかな？お隣さんに挨拶にいかなくちゃ。」
私は女神の用意した服に着替えると、家を出た。大きな武家屋敷の門の前に立ち表札を確認する、衛宮と書いてある・・・・。少し考えてると後ろから声をかけられた。
士郎「家に何かようかな？」
後ろを振り向くと、衛宮士郎が立っていた。この世界の主人公だ。
千夜「初めまして、隣に越してきた星村千夜です。」
士郎「こちらこそ、よろしく。星村さん。衛宮士郎です。」
千夜「私のことは千夜と呼んでください。衛宮さん。」
士郎「じゃあ俺のことも士郎と呼んでくれて構わないよ。」
千夜「ふふ、そうさせてもらいます、士郎。では失礼します。」
私は挨拶を済ますと早々に衛宮邸を後にした。私は家に戻り認識阻害の結界を家に張った。
千夜「これでいいかな。まさか隣に主人公が住んでるなんて思わなかったわ。」
ピンポーン、玄関でチャイムが鳴った。私は急いで玄関へ向かった。

千夜「はい。どちら様ですか？」
返事がない、まさか、魔術師であることがバレたのだろうか、完全に魔力は隠してたはずなのに。
警戒しながら玄関を開けるとそこには、何もいなかったが、先程までたしかに誰かがいた痕跡があった。
千夜「おかしいわね、絶対誰かいたのに。」
私が不思議に思っていると、上から何かが襲ってきた。間一髪左に避けると、先程まで私がいた空間を何かが切り裂いた。戦うしかないかと思った瞬間、士郎が何かをもってやってきた。
士郎「千夜、これ良かったら食べないか、作り過ぎちゃってさ。」
千夜「危ない、避けて」
士郎「えっ、何をだよ。」
士郎がつぶやくとほぼ同時に何かが肉を貫く音がした、ザシュ・・・。

士郎「えっ、なんでさ」
士郎がお決まりの口癖と共に口から血を吐き倒れる、腹部に損傷があるようだが致命傷ではないようだ。
既に何かはここから完全に立ち去ったようだった・・・。
千夜「なんてタイミングでくるのかしら、士郎は・・・」
千夜「治癒魔術使えないのに、あれを使うしかないか。」
千夜「同調開始（トレースオン）」
私はある程度の過程のみ行い「全て遠き理想郷（アヴァロン）」を投影した。
千夜「全て遠き理想郷（アヴァロン）」
私は真名をつぶやきそれを士郎の傷口に当てた。効果があったのか傷は完全に癒えたようだった。
次の瞬間、全て遠き理想郷（アヴァロン）は砕け散った、投影する過程を端折ったからだろうか。
士郎「うっ、千夜、大丈夫か？あれ傷が消えてる？」
千夜「私は大丈夫よ、士郎の傷はいつの間にか治ったみたいね。」
私はとぼけながら答える、士郎はまるで狐にでもつままれたかのよ

うな顔をしている。
千夜「で、何を持ってきてくれたのかしら？」
士郎「肉じゃがだよ、つくりすぎたからさ・・・・」
士郎の後ろに肉じゃがの入った容器が無残な状態で転がっている。
しばしの沈黙のあと、士郎はつぶやいていた。
士郎「なんでさ、俺の力作が・・・・。」
千夜「また今度ご馳走になるわ、士郎」
私がそういうと士郎は頷き隣の衛宮邸へ帰っていた、私はというと先程の襲撃者について考えていた、まだ聖杯戦争は始まってないはずだし、死徒もいない世界のはずなんだけど・・・・女神に聞いてみよう。
千夜「色ボケ女神聞こえる？」
女神「千夜ちゃん非道い、誰が色ボケよ？」
千夜「あんたよ、あんた。聞きたいことがあるんだけど？」
女神「何かしら？」
千夜「さっきの襲撃者はなんなの？」
女神「死徒よ。ここは型月作品すべての世界に繋がっちゃたの。」
千夜「えっ、何故？」
女神が言うには私が転生したとき使った儀式魔術の力が強大過ぎ並行世界の境界を破壊したらしい。おまけに女神が術式を間違えたためらしい・・・。
女神「ごめん、千夜ちゃん。機嫌なおしてよ、ね。」
千夜「はあ、あんたは赤い悪魔か？」
女神「非道いわ、私はあそこまでうっかりを発動させないわ。」
私は心の中で似たようなものだと思った。
千夜「まあ、いいわ、済んだことだし。」
私がそういうと女神は急に笑顔になり、いきなり私の唇を奪った。
女神「千夜ちゃんの初めて奪ちゃった（笑）」
千夜「この色ボケ女神、私に百合属性はないわよ。」
女神「えー、つまんない。」

女神のボヤキを無視しながら私は詠唱を始めた。
千夜「体は剣で出来ている、血潮は鉄で、心はガラス、」
女神が周辺の変化に気づいたのかいきなり叫び出した。
女神「千夜ちゃん、待って、もう二度としないから許して、お願い。」
千夜「次やったら、死んでもらうからね、たとえ女神でもね」
女神「わかったわよ、約束する。」
女神はそう言うとそそくさと時空の歪に消えていった。

な、なんでこうなるの。（後書き）

作者です。今回は千夜について解説します。
名前　星村（ほしむら）　千夜（ちや）
年齢　１６歳
穂群原学園の２年生、今後弓道部に引き込まれる予定。
ちなみに胸はＣカップぐらい。背後に立たれるのが嫌い（女神のせい）
転生前の記憶はそのまま残っている。

作者「さて、次回予告」
千夜「ねえ、作者さん、」
作者「千夜ちゃん、いつ来たの？」
千夜「さっきからいたわよ、なんか、チートが付いてるんだけど？」
作者「あっ、忘れてた、詳しくは次回、女神に聞いて。」
千夜「はいはい。次回はワカメがスープになります。」
作者「そこ、嘘予告をしない」
次回予告
あるはずだった世界はとある事情で壊れていた、死徒の出現、隠されたチート能力、突如現れた、虎聖杯、入り乱れる型月キャラ、暴走する冬木の虎ＶＳ千夜。
千夜「私を怒らせたわね、死になさい。」

壊れた世界の始まり（前書き）

前回予告にて明らかになった追加された千夜のチート能力とは？

壊れた世界の始まり

ジリリリリン、目覚まし時計が派手に音を立てている、もう朝なんだろうか。
千夜「ん、もう朝なの？やばっ、遅刻する。」
千夜は飛び起き、急いで穂群原学園の制服に着替える。朝食にカロリーメイトをくわえながら、家を出た、千夜が学園に向かい走っていると、前方に士郎が歩いている。
千夜「おはようございます、士郎。」
士郎「えっ、千夜じゃないか、おはよう。」
士郎「うちの制服を着てるってことは、編入してきたのか。」
千夜「ええ。」
話しているうちに学園についた、そこに偶然なんだろうか、嫌味なワカメがいた。
ワカメ「よう、衛宮、朝からお熱いことで。」
ワカメが士郎にイヤミを言う、そして私に話しかけてきた。
ワカメ「君さ～こんな奴と一緒にいるより、僕と一緒に、ぐえ。」
千夜「話しかけないでくれるかしら、ワカメさん。」
私はワカメに返答しながら金的蹴りを食らわした。悶絶しながら蹲るワカメを通り過ぎ、私は士郎に聞いた。
千夜「職員室はどこかしら？」
後に士郎は語っている、あの時の千夜の笑顔は赤い悪魔のようだったと。
士郎「案内するよ。」
私は士郎に案内され職員室に行き、自分のクラスや担任を確認したところ、士郎と同じクラスになっていた。そして、藤村先生が来るのを待っていた。
大河「ごめん、お待たせ、星村さん。」
私は藤村先生と共に教室へ行き、クラスメートに自己紹介をし、席

は士郎の隣になった。
それからはクラスメートから色々と質問攻めにされ、あっという間に放課後になっていた。
士郎は弓道部にまだ在籍しているようで顔を出すと言って弓道場に消えて行った。
私は帰ろうと校門に向かうとワカメが待っていた、何か言いたそうにしている。
ワカメ「朝はよくもやってくれたな。」
叫びながら殴りかかってくるワカメ、私はそれを軽く受け流し、ワカメを蹴り飛ばす。
千夜「女に手を上げるなんて最低ね、ワカメ。」
鳩尾に蹴りを食らったワカメだが、立ち上がってきた。手に魔術書のようなものを持っている。
ワカメ「ライダー、来い。」
私は驚いたまだ聖杯戦争は始まっていないはず、それにワカメがライダーを学園で呼ぶのはもう少し先のはずだった。そんなことを思っているうちにライダーが現れていた。それと同時に鎖のついた短剣が飛んでくる。
千夜「同調開始（トレースオン）」
私はそう詠唱すると黒鍵を投影した、激辛麻婆が好きな新譜が得意とする武器だ。
ワカメ「な、どこから出した、ぐえっ」
私はライダーではなくワカメに向け黒鍵を投擲していた、そのうちの一本がワカメに当たったようだ、
黒鍵の鉄鋼作用で吹き飛ぶワカメ、ライダーがワカメの元に駆け寄る。
ライダー「大丈夫ですか、マスター」
ワカメ「ライダーなにやってる、あの女を殺せよ。」
どうやら私を殺す気らしい。
千夜「そう、なら私も本気で相手してあげるわ。覚悟はいい、ワカ

メとライダー！」
千夜「Ｉ　ａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｒｎ　ｏｆ　ｍｙｓｗｏｒｄ（我が骨子はねじれ狂う）」
私が詠唱し終わると、あの錬鉄の英雄が使っていた黒い洋弓と偽・螺旋剣が投影された。
私は矢を番えるとライダーたちに向かい矢を放った。
ライダー「逃げてください、マスター。」
ライダーがワカメに告げるが遅い。
千夜「ブロークンファンタズム（壊れた幻想）」
私がつぶやくと同時に偽・螺旋剣が持つ膨大な魔力が開放され、辺り一面を吹き飛ばした。
千夜「殺ったの？」
当たりを見回すと肉の焼ける臭いがしてきた、ワカメは死んだようだがライダーが見当たらない。
少し先にライダーを見つけた。半身がボロボロだが生きているようだ。
千夜「同調開始（トレースオン）」
私はハルペーを投影しライダーの首めがけて投擲する、ライダーは躱すことすらできず首を落とされた。そして、無に帰っていく。私は誰にも見られてないことを祈り、急ぎ帰路についた。
私は帰宅するとテレビを付けてみた、私が起こした爆発は学園に大損害を与えたらしいが、死者はワカメのみで、負傷者などは居なかった、不幸中の幸いだ。
女神「千夜ちゃんいる？」
いきなり女神が目の前に出てきた。この女神暇なんだろうか？と訝しんでいると。
女神「暇じゃないわよ、千夜ちゃんにつたえわすれたことがあって～。」
女神が言うには私に後から付与したチートがあるらしく、説明に来たらしい。

女神「まず、ランクA以下の攻撃は無効になるわ、次に無詠唱での魔術行使が出来るわ、宝具クラスの　　真名開放や固有結界は使えないけどね、最後にこれは取って置きよ近接格闘のランクがSクラス　　になってるわ。」
女神「セイバーにも勝てるわよ。」
流石に私も驚いた。これなら英霊抜きで聖杯戦争に勝てそうだ。
千夜「そういえば、今日ライダーとワカメを始末したわ。おかげで学園は休校になったけどね。」
女神「忘れてたわ、聖杯が現れたの。」
女神が言うには今までの聖杯戦争の聖杯とは違うらしいが願望器であることは間違いないらしい、いきなりの出現だったため、魔術協会や麻婆神父も気づくのが遅れたらしい、もちろん間桐以外の魔術師たちもだが。さらに今回は英霊抜きでも参加可能らしい、それを聞いた私は女神に告げた。
千夜「聖杯戦争に参加するわ。」
言峰「ここに聖杯戦争の開始を宣言する。さあ聖杯を求め殺し合え。」
翌日私は言峰教会で麻婆神父の宣言を聞いていた。今回は魔術師や召喚されてない英霊たちも受肉しているためかなりの参加者がいるようだ。それだけ強大な力の聖杯なんだろう
参加者
真祖の姫君、英雄王、両義　式、遠坂　凛&英霊エミヤ、ランサー&バゼット、士郎&セイバー、ロリブルマ&バーサーカー、女神が調べてくれた参加者たちだった。

壊れた世界の始まり（後書き）

どうも作者です、さて何故か千夜が言ったようにワカメ居なくなりましたね。

千夜「当然じゃない、あんな雑種。」

作者「あの千夜さん金ぴかみたいなこと言わない。」

千夜「あら、偶然よ偶然。」

作者「ひぃ、千夜さんその後ろに浮かんでる無数の剣しまって。」

千夜「仕方ないわね。」

千夜「ところで作者、今回の聖杯はなんなの。」

作者「あれは、冬木の虎が自分専用シナリオが欲しいと言って願ったら。現れた虎聖杯だよ。」

大河「虎って言うな～。」

作者「噂をすればなんとやら。」

千夜「ほんとね、後書きに出てこれるなんて真祖の姫君もびっくりの妄想具現化ね」

大河「うるさい、外野共、次回からは虎聖杯戦争開始よ。」

千夜「外野ですって？」

千夜「本編でどうなるか覚えときなさいよ、冬木の虎」

大河「虎竹刀のサビにしてくれるわ。」

作者「次回、死闘開始、よろしくね。」

最強の敵！？（前書き）

もう４話目ですね、文章力ないため読みにくいかもしれませんがよろしくお願いしまつ

最強の敵！？

昨日開始が宣言された、虎聖杯戦争、まだ、大規模な戦闘は行われてないようだ。
千夜「女神、そういえば、あんた、名前あるの？」
女神「名前は忘れちゃった。」
千夜「私が付けてあげるわよ、呼びづらいし。」
女神「千夜ちゃん、優しいのね。」
女神は喜んでいるようだ。さて、なんて呼ぼうかな。
千夜「アリスなんてどう、あんた、可愛いんだし。」
アリス「それでいいわ、千夜ちゃんが呼びやすければ。」
アリス「名前をくれたお礼に、これあげる。」
アリスが時空の歪に手を突っ込み何かを取り出した。
アリス「これは、一見するとただの日本刀だけど、魔力を通すとなんでも切れる概念武装よ」
アリスは概念武装と言うが、どう考えても神造兵器だと思う。それにそんなダガー聞いたことがない。
アリス「これは、私が作ったオリジナル武器だから。」
千夜「チートよね、それ？投影もできるの？」
アリス「そうとも言うわね。投影できるわよ。」
アリスが言うには、これ自体の存在そのものは宝具に近くランクはA＋になるらしい、真名は私が自由につければいいとのことだ。また、来いと念じれば手元に来るらしい。
千夜「よし、決まったわ、神斬刀（しんざんとう）よ。」
アリス「私を切らないでね、千夜ちゃん。」
千夜「もちろん、切ったりしないわよ。」
私はそう言うと神斬刀を鞘にしまった。そのとき、結界を何かが突き破った。
？「もろい結界ね、お嬢ちゃん。」

そこには空中に浮遊する女がいた、この結界を簡単に破る奴なんてそうそういない。
千夜「あんた、キャスターね、この結界は宝石爺でも簡単には破れないのよ。」
キャスター「察しがいいのね、お嬢ちゃん。」
キャスターは笑いながら、杖を私に向ける。
キャスター「ここであなたは退場よ、私の宗一郎様のために。」
千夜「黙りなさい、キャス子、退場はあんたよ。」
私は無詠唱で干将・莫邪を投影し、投擲する。あっさり躱されたがそれでいい。
千夜「Ｉａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｒｎ　ｏｆ　ｍｙｓｗｏｒｄ（我が骨子はねじれ狂う）」
偽・螺旋剣（カラドボルグ？）を投影し弓に番えると、キャス子に狙いを定める。
千夜「これは躱すことができるかしら？キャス子。」
キャス子「ただの矢じゃないの、お嬢ちゃん。」
ヒュン、空気を切る音がし偽・螺旋剣（カラドボルグ）がキャス子に向かって飛んでいく。
キャス子が詠唱を始めた。一撃で殺す気らしい。
千夜「さよなら、壊れた幻想（ブロークンファンタズム）」
私がつぶやくと同時に膨大な魔力が爆ぜる、手応えはあったが、相手はあのキャス子だ。
キャス子「なかなかやるわね、お嬢ちゃん、でも残念ね、馬鹿な、後ろから・・・・」
そう最初に投擲した干将・莫邪が私のもとへ戻る途中キャス子を貫いた、しかし、まだ生きているようだ、しぶとい奴。
キャス子「たかが、人の身で良くここまでやってくれたわね。」
キャス子が逃げようとしている、私は無詠唱で複数の剣を空中に投影する、パチン、私が指を鳴らすとキャス子に向かって飛んで行く、そして、キャス子に突き刺さる無数の剣、流石に躱せなかったよう

だ。既にキャス子の体が消え始めている。そして完全に消滅した。
その頃、深山町のどこかで遠坂凛と士郎がお互い対バーサーカーに関してのみ協力すると決めていた。
千夜「何か疲れたわ、もう今日は、お客さんは来ないわよね。」
アリス「千夜ちゃん、あ、あれ。」
アリスが私の後ろを指差し驚いている。私が振り返ると、バーサーカーとイリアがいた。
イリヤ「お姉ちゃん、強いんだね、キャスターを倒しちゃうなんて。」
イリア「私はイリヤ・スフィール・フォン・アインツベルン、よろしくね。」
スカートの裾を持ち、貴族のお嬢様のような挨拶をする、攻撃してくるような雰囲気は感じられない。
イリヤ「今日は挨拶に来ただけ、次あったら、殺してあげる。」
イリヤがそう言いながら微笑む。とりあえず今日は戦わなくて済むようだ。気がつくとイリアとバーサーカーもいなくなっていた。バーサーカーは強敵になるだろう、私はそう感じた。
翌日、結界を張り直した私は、朝食を作っていた、アリスはというと、どこかの腹ペコ王のように、朝食が出来るのを待っている。
千夜「アリス、もうすぐご飯できるわよ。」
今日の朝食は私が腕によりをかけて作った純和風のメニューだ。
厚焼き玉子、味噌汁、肉じゃが、胡瓜とタコの酢の物だ、思わず私はつぶやいていた。
千夜「私、いい奥さんになれるかも。」
それを聞いていたアリスが私にこう言い放った。
アリス「なれるわよ、なんなら私がもらってあげてもいいわよ。」
千夜「ア・リ・ス、ちょっとお話しようか。」
私は神斬刀片手に、アリスに詰め寄る。アリスは何かをつぶやいている。
アリス「女神の名において命ずる、武器よされ。」

アリスが詠唱し終わった瞬間私の手元から神斬刀が弾き飛ばされた、それだけならよかったのだが、一緒に服も脱げていた。
千夜「きゃっ、何するのよ、アリス。」
アリス「あれ、武器のみ弾いたはずなんだけど・・・」
私はとりあえず着替えを取りに私の部屋へ行く途中、玄関がいきなり開いた。
士郎「千夜いるか・・・、」
千夜「士郎、今、見た？見ちゃった？」
私は士郎に問いただす、だが返事がない、玄関が士郎の鼻血で赤く染まっている。
千夜「キャー、士郎しかっりして。」
数時間後、貧血から士郎は回復した。
士郎「すまん、千夜、見るつもりはなかったんだ。」
千夜「私もまさか、士郎がくるなんて思わなかったし・・・」
私は少し赤面しながら言葉をつないだ。
千夜「私の下着姿を見たんだから、責任取りなさいよね。」
士郎「ま、待ってくれ、責任と言われても。」
アリス「士郎君観念して、付き合っちゃいなさい。」
士郎「なんでさ。」
千夜「じゃあ、責任取らないつもり？」
私がそう言うと、士郎は逃げ出そうとしている、私はマグダラの聖骸布を投影し、士郎めがけて振りかざす。
千夜「フィーッシュ」
士郎が聖骸布に巻き取られ戻ってきた、その後二時間かけて話し合った結果、一日デートするという約束をした、ほとんどアリスが、決めたのだが。そのデートの時、凛やセイバー、桜に目撃され、修羅場になったのはまた別の話。
トラブルが起きたせいですっかり冷めた朝食を食べ、それが朝昼兼用の食事になった。
アリス「美味しかった、ごちそうさま。」

千夜「おそまつさまでした。」
私は、バーサーカーを探すため、単身アインツベルンの森へと向かった。
気配と魔力を遮断しているため、あちら側に気づかれた様子はない、少し先に城のような建物が見える。あれが、風雲イリヤ城なんだろうか？しばらく歩くと城門のような場所に到着した、潜ろうとしたとき、突然巨大なハルバートが飛んできた、バキッ、私は既のところでハルバートを躱す。
ハルバートは地面に突き刺さっている。どうやら敵は近くに居ないらしい、城門を無事潜ると、その先にメイドが二人いた、おそらくセラとリズなのだろう。
セラ&リズ「侵入者を排除する。イリア守るため」
千夜「外野は引っ込んでなさい。」
千夜「約束された勝利の剣（エクスカリバー）」
明らかにオーバーキルだと分かっていたが、あえて私は騎士王の宝具を真名開放した、セラとリズは躱すことすらできず塵とかした、後には抉れた地面が威力の凄まじさを物語っていた。
流石にこの城の持ち主も気づいたようだ。
イリヤ「サーヴァントもつれずに来るなんて、無謀ね。バーサーカー殺っちゃえ。」
降り下ろされる巨大な石斧、私はそれをサイドステップで躱す。衝撃波で服が切れる。
千夜「なんて怪力なの、さすが、バーサーカーね。」
千夜「天の鎖」
私がつぶやくとエンキドゥの天の鎖がバーサーカーを拘束する。
イリヤ「なんで、バーサーカーの正体を知ってるの。」
私はランクA以上の宝具を投影するため詠唱を開始した。
千夜「体は剣で出来ている、

血潮は鉄で、心は硝子、

幾たびの戦場を超えて不敗
ただ一度の敗走もなく
ただ一度の勝利もなし
担い手はここに弧り
剣の丘で鉄を鍛つ
ならば、　我が生涯に意味は不要ず
この体は、無限の剣で出来ていた」

最強の敵！？（後書き）

作者です、どうも。千夜ちゃん無茶苦茶原作ブレイクしてますね。
千夜「作者、あんたがそうさせているんだと思うぞ。」
作者「うわ、ばれた？」
千夜「読者も気づいてるはず。」
作者「やっぱり～（笑）」
千夜「神斬刀で１７分割してあげましょうか？」
作者「真祖の姫君と同じかい」
アルク「呼んだ？」
作者「呼んでないよ」
アルク「あっ、吸血衝動が」
カプチュウー
千夜「なんで私の血を吸ってるの？」
アルク「女の子のほうが美味しいのよ」
アルク「貴方なら死徒二十七祖に入れるわよ。」
千夜「えー、結構です。」
アルク「残念ね。」
三人「では次回予告」
イリヤ「固有結界？」
千夜「１２回死になさい。」
次々にバーサーカーに突き刺さる高ランクの宝具、そして訪れる静寂。
イリヤ「私のバーサーカーが、嫌ー」
千夜「イリヤ、あなたはどうするのかしら？」
イリヤ「私はまだ、死にたくないよ」
千夜「なら、助けてあげるわ。」
次回最強の敵パート２
もしくは急遽、番外編の可能性もあり。

士郎、災難に遭う。そして千夜が勝利宣言する（前書き）

このお話は虎聖杯戦争後のとある一日のお話です。
アーネンエルベ前から始まります。

士郎、災難に遭う。そして千夜が勝利宣言する

士郎「千夜、待たせたかな？」
士郎が私に聞いてくる。
千夜「私も今来たとこなの。」
ここはアーネンエルベ、新都にある喫茶店だ。私は初めて来るのだが、士郎は来たことがあるらしい。
アリスはマグダラの聖骸布で縛ってきた。邪魔しかねないからだ。
士郎「こんにちは。マスター、」
カレン「いらっしゃいませ。」
ジョージ「やあ、士郎君」
凛「あら、衛宮君じゃない。」
桜「先輩、どうしたんですか？」
セイバー「士郎、何故ここに？」
凛、桜、セ「そして、その横の可愛い女の子は誰？」
ヤバイ、殺気がみなぎっている、私は士郎の腕をつかみ、一気に駆け出した。
士郎「千夜、ヤバイ、後ろから追ってくるぞ。」
私が振り向くとまるで死徒のような形相をした三人が追ってきている。
千夜「士郎、逃げて、私がなんとかする。」
士郎「千夜、危険だ、一緒に逃げるぞ。」
そうこうしているうちに追いつかれていた。
千夜「士郎、覚悟決めなさい。」
士郎「千夜、何するつもりだ。」
私は無詠唱で干将・莫邪を投影した。そして、素早く三人の服のみを切り裂いた。
三人「えっ、アーチャーの剣。」
三人「今何か通ったような、きゃあ」

私がもとの場所に戻ったとき三人の服のみ切れた、その隙を付き、
士郎の腕をつかみ深山町に向かい走り去った。
千夜「ここまで来たら、大丈夫でしょ？」
士郎と歩きながら私の家へ向かっていると、金髪の女性に出会った。
あれは真祖の姫君、アルクウェイドだろうか？
アルク「ちょっとそこのカップルさん？遠野志貴を知らない？」
千夜「誰それ？知らないわ？」
アルク「そう、あら、いい匂いがするわ。」
アルクが私の方に歩み寄ってくる、次の瞬間、カプ、私は首に噛み付かれていた。
千夜「嫌、何するの血を吸わないで。」
アルク「あら、察しがいいわね魔術師さん、貴方の血美味しいわね。」
アルク「これであなたも私と同じ吸血鬼ね。」
こうして、私は死徒にされてしまった。
士郎「大丈夫か千夜？太陽の光当たってるぞ」
千夜「何か暑い。」
士郎「映画とは違うんだな。」
なんとか私の家にたどり着いた私はそのまま眠ってしまったようだ。
朝
千夜「あー、何かだるいアルクのせいね。あれ？何かある？」
それが何か分かったとき私は、赤面してしまった。昨日士郎に抱きついたまま寝てしまったようだ。
士郎「千夜よく眠れたか？」
士郎が私の顔を見つめながら聞いてくる、そして、今の状況に気づいたようだ。
士郎「千夜、俺はなんにもしてないからな。」
赤くなる士郎・・・・、よく見ると私は下着姿だった、しかも胸が士郎の腕に思い切りあたっている。
千夜「また、見られちゃった。もうお嫁に行けないわ～」

士郎「これは不可抗力だ。」
ドゴーン、吹き飛ぶ玄関、近づく三人の足音、敵なんだろうか、それともあの三人か？
事態はさらに悪い方へ進むみたいだ。あの三人が侵入したようだ。
千夜「士郎、早く、私から離れて、くるわよ。」
士郎「ちょっと待ってくれ、うわっ」
士郎が慌てて離れようとしたため、布団につまづき、私の方にこけてきた、そして士郎に押し倒されるような体勢になってしまった。
そして開く襖、修羅場が訪れた。
三人「士郎（セイバー）、衛宮君（凛）、先輩（桜）、朝からお盛んね。」
士郎「違う、これはアクシデントだ。なあ千夜。」
千夜「聞こえてないみたいよ。戦うわよ」
千夜「アリス、いる？」
アリス「んーんー」
千夜「あっ、縛ったままだった。」
私はマグダラの聖骸布を消した、そしてアリスを再び呼んでみる
アリス「千夜ちゃん、こういうプレイが好きなら、言ってくれればいいのに。」
千夜「アリス、服持ってきてくれる？」
私は片手にチャクラムを投影しお願いした。
アリス「わかりました、千夜お嬢様」
ものの数秒でアリスが昨日来てたのと同じデザインの服を持ってきた。
急いで着替えると士朗をアリスに頼み、庭に出た。
千夜「さて、かかってきたら？」
その言葉と同時にセイバーが斬撃を放つ、私はそれをチャクラムでいなし、後ろに飛ぶ。
セイバー「なっ、なかなかやりますね」
凛「嘘、セイバーの攻撃を躱した？」

驚きながらも凛がガンドと魔力の詰まった宝石を放つ、私はジャンプし上空から投影した黒鍵を投擲する。さらに凛が驚く。
凛「代行者なの？厄介ね」
千夜「代行者ではないわよ。」
私は接近し凛の鳩尾へ膝蹴りを食らわす、桜が怒りを露にする。
桜「よくも姉さんを、そして私の先輩をとったわね。」
千夜「嫉妬してるの？」
桜「！！」
私は桜にＣＱＣを食らわせ気絶させる。セイバーはというと私に対し剣を構え隙を伺っている。
セイバー「そこっ」
私がわざと隙を作ると誘いに乗ったセイバーが切りかかってきた。
私は神斬刀を抜くと魔力を通した。
スパッ、セイバーの髪が切れる。
セイバー「何故、髪を、今の状態なら私を討てたはずです。」
千夜「殺す必要ないからかな。」
セイバー「私の負けですね。」
ガックリと肩を落とすセイバー、こうして第一次士郎争奪戦は幕を閉じた。
士郎「なんでさ」
千夜「これで士郎は私のものね。」
士郎「結局デートでは責任取れないのか。」
千夜「私の下着姿を二回もみて、一緒の布団で寝て、押し倒したんだから当然よ。」
こうして、千夜が本来、凛やセイバーが至るはずだったポジションに収まった。

士郎、災難に遭う。そして千夜が勝利宣言する（後書き）

作者です、今回は番外編を書きました。いかがでしたでしょうか？
千夜「作者、なんで私が死徒化してるのよ？」
作者「アルクに吸血されたじゃん」
千夜「何かいろろな設定を端折ってない？」
作者「月姫はあまり詳しくないのだよ。」
千夜「偉そうに言うな。貴方も死徒になりなさい」
作者「遠慮しとくよ。」
士郎「見つけたぞ。作者」
作者「げっ。士郎、いや、アーチャーか？」
千夜「作者、あまりネタバレさせない。」
士郎「なんで俺が、あんなひどい目に合うんだ。」
作者・千夜「原作でもそうだったじゃん。じゃない。」
士郎「確かに、いつも遠坂にはガンド撃たれたりしていたけど。」
士郎「その前に作者死ね。壊れた幻想（ブロークンファンタズム）」
作者「うわあ、」
士郎「殺ったか？」
作者「甘い、熾天纏う七つの円環（ローアイアス）」
士郎「なんでさ、作者までその技使うの？」
作者「士郎、君には別の世界へ行ってもらおう」
士郎「宝石剣ゼルリッチ！！なんでここに」
士郎「次こそは――――！！！」
次回予告
いよいよ、最強の敵編完結か？
それとも、もっと厄介になるのか

最強の敵！？ｐａｒｔ２（前書き）

感想が入ってました、つまらないとのことです。しかし私の心はガラスでは出来ていません、なのでこれからも、つまらない小説を連載させていただきます。
では最強の敵！？ｐａｒｔ２始まります。

最強の敵！？part2

千夜が詠昌を終えると。周辺の景色が塗り替えられる、赤い荒野に突き刺さる無数の剣。
「固有結界、そんな」
イリヤが驚愕する、そんなイリヤに私は告げた。
「いくらバーサーカでもこれだけの高ランクの宝具には耐えれないでしょうね。」
「死になさい、バーサーカー」
私は複数の高ランクの宝具をバーサーカーへ射出する、肉を切り裂く音が当たりに響く。
「私のバーサーカーが殺されちゃった。」
イリヤが寂しそうに呟く。
バーサーカーはもう居ない。
私はイリヤに問いかける。
「イリヤ、あなたはどうするの？」

「えっ、殺さないの？」

「殺す気があれば、とっくに貴方は死んでるわよ。」
千夜とイリヤが会話をしていると、そこへ士郎と遠坂　凛、そして彼らのサーヴァントが到着する。
「えっ、千夜？」
士郎が私に気づく。その声に遠坂　凛も気づいたようだ。
「何で、星村さんがここにいるのよ、衛宮君。」
「私がここにいる理由？バーサーカーを倒しに来たのよ。」
千夜の言葉に驚きを隠せない二人。さらに千夜が続ける。
「バーサーカーは倒したわよ、それとも、私と戦う気かしら？」
凛がその言葉に答える。

「サーヴァントなしでどうやって、バーサーカーを倒したのかしら？星村さん？」
「さあて、あなたに教えると思う？」
私は凛の質問に答えなかった。凛は私へ攻撃をする様子はない。後ろの錬鉄の英雄もだ。
「士郎、貴方は、どうするの？戦うの？」
私は士郎に問い掛ける。
「俺は、戦わない。千夜は女の子じゃないか。」
その言葉に錬鉄の英雄が言葉をはさむ。
「衛宮士郎、貴様は甘すぎる。」
確かに士郎は甘い、この場に及んで私を女の子扱いするなんて、とてもマスターのすることじゃない。
騎士王も何か言いたそうだが、抑えているようだ。長い沈黙が場を支配する。その沈黙を凛が破った。
「はいはい、もう興ざめだわ、帰りましょう、アーチャー、衛宮君。セイバーもいいわね。」
仕方なく頷く三人、そして彼らは去っていた、さり際、凛がこう言い残した。
「次、会うときは、敵同士、今回のようなことはないわ。」
その言葉に、答える私。
「ええ、そうね。」
彼らの姿が遠くへ離れ、見えなくなったのを確認しイリヤに告げた。
「イリヤ、私の家に来ない？あなた一人ぐらい面倒見るわよ。」
イリヤが聞き返してくる
「本当にいいの、さっきまで敵同士だったんだよ？」
私は答える。
「ええ、構わないわよ。」
その言葉を聞きイリヤに笑顔がもどる。
「本当？ありがとうお姉ちゃん。」
こうして、千夜の家に妹として、イリヤが暮らすことになった。

最強の敵！？ｐａｒｔ２（後書き）

ども作者です。千夜ちゃんの家に妹が増えましたね、バーサーカーに関しては、倒し方が金ぴかさんと似てましたが、気にしないでください。

「ねえ、作者？」

「何かな、千夜」

「何でセリフの前の名前が消えてるの？」

「うーん、読みにくいかと思ってね。」

「へー、」

「それと、イリヤが妹になってるんだけど。彼女私より年上よね確か。」

「設定ではそうだったね、でも妹ぽいじゃん」

「確かにね。」

「それでは次回以降の予告」

イリヤを引き取った千夜に、一時の平穏が訪れる。

そこへ士郎が訪ねてくる。何か思惑があるようだが？

凛はアーチャーと行動を開始する、そこで不思議な女性に出会う。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0909y/

転生者は原作ブレイクしました

2011年11月6日03時06分発行